



いつでも
どこでも
子どもが真ん中

大分県佐伯市
放課後児童クラブつるおか子どもの家





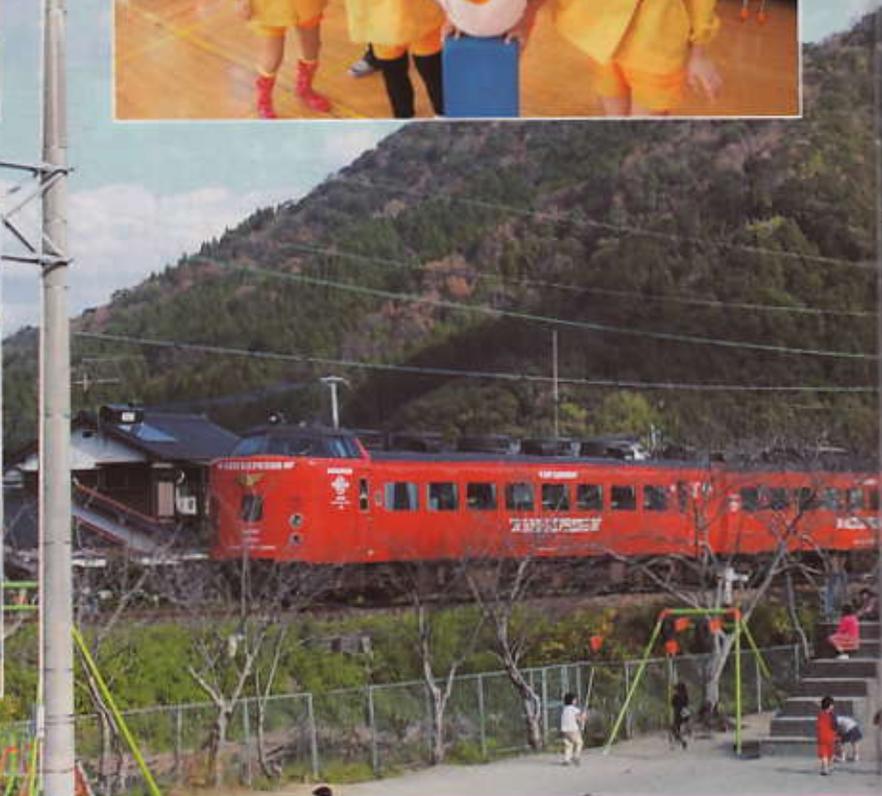


毎日学校が終わると子どもたちが「ただいま〜」と元気に帰ってくる。「お帰り〜」と迎えるのが富高国子さんたち子どもの家の指導員。取材に訪れた日は、間近に迫ったクリスマス会の出し物の特訓中だった。三時のおやつのおと、小学校の校庭で遊ぶ子、部屋の中で折り紙や工作、読書などに夢中になっている子。夕方、お迎えがくるまでの時間を幼稚園から小学校五年生までの子どもたち約百人が好きな場所で友だちや指導員と一緒に過ごすしている。

核家族化や共働き、母子家庭・父子家庭などの理由から、家に帰っても一人という子が増えた。「子どもが『ただいま』と言えば『お帰り』と返事が返ってきて、子どもたちが一緒に遊んで遊べる自分の家のような場所を作りたい」と、約十五年前、五、六人の若い母親たちが話し合った。この少人数の願いが、今や地域になくしてはならない子育て支援施設「子どもの家」を作り上げた。

市と交渉を重ねた末、空き施設となった旧公民館の使用許可がもらえ、ここが子どもの家と決まった。小学校、幼稚園に隣接する絶好の立地条件。小学校と幼稚園の許可も受け、野球や陸上の練習に邪魔にならないようにしてグラウンドや滑り台などの遊具も利用できる。ただし、建物が老朽化していることや雨の日には子どもたち全員を収容するには狭すぎるというのが難点のようだ。なんといっても、約百人の子どもの家がこのこへやってくるのだ。

指導員は十一名で、元小学校や養護、幼稚園の



先生、調理師免許を持っている人もいるが、資格に関係なく子ども大好き主婦たちだ。今一番の悩みは、年々増える入所希望者の選考だという。現在の建物と十一人の指導員ではこれ以上の子どもを受け入れるのはむずかしい。そこで判断がしにくい時は運営委員会に相談し、母子または父子家庭で保護者が一生懸命働いており、家に帰っても誰もいない幼稚園児や一年生の子をまず優先的に受け入れることにしているという。

「子どもの家」の運営は、地区社会福祉協議会が運営母体で民生委員や主任児童委員のほか自治連合会、老人クラブ連合会、PTAなど校区にある諸団体の協力により運営されている。さらに、中高校生のボランティアの存在も大きい。かつての利用者が大きくなって「弟妹」たちの面倒を見ようと手伝いに来てくれる。高校の選択授業で保育を希望する生徒や短大の保育科の学生が実習に来たりもする。夏休み恒例のキャンプも、「兄弟」ボランティアの活躍なくしては実現できない。なんとといっても子どもと大人総勢二百人のキャンプなのだ。

「子どもの命を守れてよかった」これはキャンプを終えたときの「お兄さん」がもらした言葉だそう。イカダでの川下りなど子どもたちにとってはかなりスリリングなキャンプ。富高さんはこの言葉を聞いて「楽しむだけではなく、ボランティアのお兄さんお姉さんたちが子どもをどう見ているかが伝わってくるようで感動した」と言う。「子どもの命を守った」という実感は、お兄さん



お姉さんたちにとっても小さくない経験だったに
違いない。

ほかに、近くの公園に出かけるおにぎり遠足、
介護教室や手話、点字学習会、老人クラブの方々
との交流など盛りだくさん。また、入所している
子どもの遊びの場としてだけでなく、地域福祉活
動の拠点にしたいと考え、子育て支援の一つとし
て乳幼児を持つ若い親との交流を目的に「トトロ
の広場」も開いている。週一回、〇〜四歳までの
未就園児とその親を対象に、指導員と一緒にリス
ムや読み聞かせ、エプロンシアターを観たりして
親同士の友だちづくりや憩いの場となっている。

「今の子どもたちに自分が育っている地域と育
ててくれる地域の人たちを知ってもらうことがや
がては地域や地域の人たちを大切にする人になっ
ていく」と話すのは江藤まつみさん。子どもの家
は、地域に根ざし、地域で育つ子どもたちになっ
てほしいと、地域の住民や諸団体との連携を大事
にしている。そしてなにより、「いつでも、どこ
でも子どもが真ん中」を大切にしている。

連絡先

つるおか子どもの家

大分県佐伯市

鶴岡町三一七一九

TEL 0972-20-0726